野球をやろう！

雄輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
野球をやろう！

【Ｎコード】
Ｎ９４０２Ｃ

【作者名】
雄輔

【あらすじ】
主人公の涼が夢みたきっかけに、涼の友達の海が正夢だと言いだし、三人で野球部に入部しようと言いだす。しかも、自分の味方だった、狼までも賛成して…３月２１日更新しました。

1・夢です（前書き）

小説書くのは2回目です。連載は初めてだよ。頑張りますので、最後まで見ていただけたら嬉しいよ。

1・夢です

ズバーン

「ストライク！」

審判がそう言った瞬間、球場は歓喜に包まれた。

少し間、俺はあまり嬉しさに動けなかった。

「水谷、お前ならやってくれると思ったぜ！」

キャッチャーの声が聞こえた。

「大丈夫か？」

軽く肩を叩かれた。

「あぁ。ちょっと嬉しかったから。」

「そうだよなぁ～、まさか俺らが甲子園行けるなんてなぁ。夢みたいだな！」

彼は嬉しそうに笑ってる。

「そうだな。あっ！みんなもう集まってるぞ！早く行かないと、勝ったのに監督に怒られるぞ！」

彼は後ろを見た。そして、走り出した。

「ヤベェ～。監督もう怒ってやがる。せっかく今日はじじぃの説教聞かなくてすむと思ったのに！」

「きっと、今日位は勘弁してくれるよ。」

俺は笑いながら言った。

「俺もそう願ってるけど。なんで、お前笑ってんだよ！お前も説教くらうんだぞ！」

そんなことを言いながら、走った。

走って行くと、監督が待っていた。

「すいません。」

二人で謝った。

「早く並べ！」

「はい！」

良かった。監督あんま怒ってなかった。
並んだ後、校歌を歌った。
なんか、半分位の人は泣いていたので、校歌の音楽が流れているだけっぽかった。
その後、いろいろあったが。
閉会式が終わり、監督の話を聞いている。
「え～、このチームで優勝出来たことを大変嬉しく思う。今日位は、優勝気分でいてもいいが、明日からはしっかり練習をし、甲子園に備えろ！私からの話はこれで以上だ。解散！」
みんな、帰る支度をしている。
「良かったよなぁ。監督に呼ばれなくて。」
「あぁ。」
「俺達も帰るか。」
「そうだな。」
そうして、帰ろうとした時、目の前が真っ暗になって、意識がとんだ。

1・夢です（後書き）

どんどん書きます。感想書いてね～。

2・学校です。（前書き）

2つ目出来たぜ。

2・学校です。

久し振りに夢を見た。
「涼〜。起きなさい。」
台所から聞こえてきた。
時計を見ると8時だった。
「ヤベェ。」
と呟いて、着替えた。
「もう時間ないんだから、早くしなさい。」
「はいはい。」
「はいは一回でよろしい。」
「わかったよ。」
パンを口に入れて、家を出る。
「いってきます。」
と言って、ドアを閉めた。
すると、
「涼〜。おはよう。」
目の前に面倒くさいやつがいた。
「おはよう。」
「おいおい、なんだよその目は。俺達、親友だろ！」
笑いながら言ってる。
「そんなことどうでもいいんだよ。今は遅刻しないように走らないといけないだよ。」
と言って走ると。奴も走って、ついてきた。
思えば、奴と出合ってからろくなことがない。
例えば、奴と出合った時。俺が自己紹介で趣味を水泳と言ったら、奴がいきなり来て。
「俺も水泳やるんだ。俺達気が合うな。今日から、親友だ。」
と言ったから、拒否しようとしたら。

「水谷！淡田！そういうことは今するな！」
と怒鳴られてしまい、しかも呼び出しを食らった。
結局、そんなこともあり、奴は俺のことを親友だと思っている。
そんなことを思い出していると。
「はぁ～。」
「おいおい、涼。ため息してると、運がなくなるぞ。」　運なんて、お前に出合ってからなくなってるよ！と言ってやりたかったが止めた。
理由は学校に着いたからだ。
教室に入ると。
キーンコーンカーンコーン。
「ギリギリセーフ。」
「良かったな。遅刻しなくて。」
この男は、俺の友達の上浦　狼だ。
そういえば、夢の中で出てきたキャッチャーは狼だ。
「良かったよ。そういえば、今日夢を見た。」
狼は不思議そうな顔をして。
「夢？どんな？」
「俺がピッチャーで、狼がキャッチャーで、最後の一球をストライクでアウトにして優勝する夢。」
そう言うと。
「それはきっと、正夢だ！今すぐ三人で、野球部に入部するぞ！」
また来たよ。
「バカだろ！第一野球なんてやったことないだろ！」
「大丈夫だ！涼の夢を信じよう！」
「その自信はどこから、出てくるんだ？」
呆れながら言った。
「淡田。確かに野球部に入るのも、いいかもしれないな。」
「はぁ？狼何言ってんだ！無理に決まってんだろ！」

びっくりした。狼がまさか淡田の味方をするなんて。

「よ～し！多数決で、入部決定！」

2・学校です。（後書き）

感想よろ～。

3・試験　淡田　（前書き）

自分なりに頑張りました。

3・試験　淡田

「全員集合！え～と、今日は新入部員を紹介する！右から名前と学年、クラス、希望ポジションを言っていけ！」
「淡田　海です。一年C組で、ポジションはファーストやりたいです！」
「次！」
「上浦　狼。一年C組。キャッチャー。」
「次！」
「水谷　涼です。一年C組で、ポジションはピッチャーを希望します。」
「よし！次は希望ポジションの試験だ。まず、ファーストから！」
「はい！」
マウンドにピッチャーが立った。淡田はバットを振ってる。
「言い出しっぺが試験落ちるなよ！」
「任せとけ！」
淡田が一番心配だ。
「大丈夫だよ。きっと。」
「そうだといいんだけどなぁ。」
「それより、涼の方が大丈夫か？」
忘れてた。俺はピッチャーやったことない。無理だろー。
「試験を始める！三球のうち一球でも、ヒットが打てたら、合格だ！では、はじめ！」
ピッチャーが構えて、投げた。
あっ！空振った。ていうか、あいつ球見えてんのか？
二球目も掠れもしなかった。
「駄目じゃん！」
そう言うと。

「俺を舐めるなよ！俺は追い詰められたほうが、強いんだ！」
「本当かよ！？」
「まぁ、淡田を信じるしかないだろ。」
「そうだな。」
三球目。ピッチャーが構えて投げた。
カキーン
打った？
たが、　よく見ると、ミットに収まっている。
あれ？今の音は？
「狼どうなってんの？」
「一応バットに当たったけど、ちょっとしか掠んなかったから、そのままミットに収まった。」
「じゃあ、不合格？」
「たぶん。」
やっぱ。期待してなかったけど。
「監督！どうにか入部させて下さい！」
諦めの悪い奴だ。
「わかった。君の熱意に免じて合格にしよう！」　試験の意味ねぇー。
「涼。見たか！俺の実力を！」
「見たよ。」
悪い意味で。

3・試験　淡田　（後書き）

いつも書いてますが、感想をよろ～。

４・試験　上浦（前書き）

今日は頑張ります！

4・試験　上浦

「次！キャッチャー。取り敢えず、さっきと同じルールで、はじめ！」
うわっ、なんか適当だな！
ピッチャー投げた。
カキーン
どんどんのびてる。あっ！ホームランだ。
ピッチャーの人落ち込んでる。ちょっと可哀相だ。
狼が戻ってきた。
「ホームラン凄いね。」
「まぐれだ」
「どこかの誰かさんとは、全然ちがうよ。」
わざと聞こえるように言った。
「涼。誤解するな。もし、俺がホームランを打っていたら、たぶんあのピッチャーは野球部を止めてしまっていただろう。俺はそこまで考えて、あえて打たないことであいつの自信喪失もある程度で収まったんだぞ！」
なんて奴だ。自分のいいようにねじまげてやがる。コイツにこんなこと言われたピッチャーが可哀相だ。
「それって、いい訳じゃん！」
「気にするなよ。」
なんかむかつく。
「上浦！合格だ！」
ピッチャーの人が来た。
「今回は試験だから、手加減したんだ。調子に乗るなよ！」
「大丈夫です。あれはまぐれだったし、あれが先輩の本気だったら、涼のほうが速いですよ。」
おいおい、俺を出すなよ。しかも嘘じゃん！

「ほう、じゃあその野郎の実力見せてもらおうじゃないか！」
「後で、後悔支度なければ止めといたほうがいいですよ。」
「ふん！せいぜい頑張るんだな！」
マジかよ。合格出来るかも分かんないのに。はぁ～。

４・試験　上浦（後書き）

感想よろ～

5・試験　水谷（前書き）

ちょっと、疲れた。

5・試験　水谷

「最後ピッチャー！ピッチャーは投げてもらう！基本的に球速が１２０を越えたら合格だ！じゃあ、はじめ！」
どうすんだよ。始まったし。フォームは大丈夫だけどなぁ。
「涼。あんだけ言っておいて、不合格になったら、格好悪いぞ！」
お前も不合格になっただろ！たまたま監督が優しかっただけじゃん！と言いたかったが、緊張していて無理。
とにかく、落ち着いて投げよう！よし！行くぜ！
構えて～投げる！
ドン
微妙な音だな！
ピピッ
「１００だ。後二球！」
１００かよ！後２０も上げんの無理だろ！
「涼。体重を使え！」
あっ！そういえば忘れてた！
よし！今度は体重をのせるぜ！
いけ～！
スパーン
おっ！さっきより、音がいいな。
ピピッ
「１２８だ。合格！」
「よっしゃ！」
「やったな！さすが俺の見込んだ男！」
お前に見込まれたくないよ！
「これで、全員合格だな。」
「それじゃあ、今日から、練習を始める！」

「監督。俺らは？」
「お前らも、練習に混ざってなれなさい！」
「じゃあ、練習しますか。」
「お前らが新入部員か。俺の名前は大杉　佐久だ。一応キャプテンだ。ポジションはセカンドだ。よろしくな！」
「よろしくお願いします。」
随分でかい人だ！１９０位ある。
「佐久～！あれ？誰だお前ら？」
今度は小さい人だ。１５０あるかないか位だ。
「宗助！また遅刻か！いい加減にしないと、監督に怒られるぞ！」
「分かった。分かった。それより、こいつらは？？」
「右から、淡田　海、上浦　狼、水谷　涼だ。」
「新入部員か。俺は相田　宗助だ。ポジションは外野だ。よろしく。」
「宗助は５０ｍ走を５．４秒で走れる。まぁ、この野球部で一番早いぞ！」
「そうだぜ！」
「まぁ、取り柄はそれだけだな！まぁ、話をするのは終わりだ！行くぞ宗助！練習。練習。」
と言って練習にしにいった。
「なんか、楽しくなりそうだな！」
「そうだな。」

「はぁ～。疲れた。」
やっと、終わったよ。
「じゃあ、帰るか。」
「そうだな！」
じゃあ、家帰って寝ますか。
「ただいま。」

「おかえり。今日は随分遅かったね。どうしたの？」
「野球部に入った。」
「へぇー。部活入ったんだ！」
「じゃあ、風呂入るから！」

ふぅ～。今日は疲れたなぁ～。もう寝るかな。

5・試験　水谷（後書き）

どんどん頑張ります！

6．学校生活？（前書き）

え～、さっき投稿しようと思ったら、文字数が１８文字足りなくて、投稿できなかった。まぁ、書きましたがね。

6．学校生活？

キーンコーンカーンコーン
「ねみぃー。」
「この頃眠そうだけど、何かあるの？」
「あぁ。こないだから、野球やりはじめた。」
「へぇ～。そうなんだ。頑張ってね。」
笑顔でいるこの少女は俺のお隣さんだ。名前は伊井　沙代だ。
「あぁ。一応頑張る。じゃあ、眠いから寝る。」
「うん。おやすみ～。」

「…う。涼！」
顔を上げると、淡田がいた。
「何だよ。」
「部活行くぞ。」
「もう、そんな時間か～。まだ、寝てたかったなぁ～。」
「しょうがないだろ。まぁ、頑張ろうぜ！」
「そうだな。」
「あれっ！狼は？」
「伊井としゃべってるぞ。悔しいよなぁ。あいつに彼女がいるのに、俺にはなぜ、彼女がいないんだ？」
狼と沙代は付き合っている。まぁ、お似合いカップルだ。
淡田に彼女がいないのは言うまでもない。
「邪魔しちゃ悪いから、先に行くぞ！」
「俺は邪魔したいな。」
おいおい、いくら彼女がいないからって、人の邪魔は駄目だろ。
「人の邪魔する暇があったら、練習して野球うまくなれよ。そしたら、モテるよ。きっと。」
無理だな。淡田が野球うまくなるなんて。

百歩譲って、うまくなっても、モテないな。この性格じゃぁ。
「そうだな。俺。練習頑張って、うまくなるよ！」
やっぱ、こいつバカだ。
「よし！気合入れてやるよ。」
パーン
「痛！強く叩き過だよ！」
「少し、力入れ過ぎた。ごめん。ごめん。」
ほんと、いてーよ。まだ、ヒリヒリするよ。
「お前ら、何やってんだ？もう、行かないと時間ないぞ。」
いつの間にか、狼が教室のドアの前にいた。
「ヤベェー！涼！時間見ろよ！」
時計を見ると４時だった。
「早く、行くぞ！」
「分かった。」
そう言って、三人で走り出した。

6．学校生活？（後書き）

暇だからまだ書きます。

7・紹介（前書き）

寝

7・紹介

え～と、この小説は野球が主です。
この頃、人名前を忘れそうな気がするので、書いときます。

水谷　　涼。一年Ｃ組３３番。
野球のポジションはピッチャー。球速は、１２８ｋ。
趣味は水泳だぞ。
性格は面倒くさがりやだ。
身長は１７１．５ｃｍ。体重は５９．３ｋｇ。
水谷君から、皆さんに一言。
「ねみぃーよ。帰りて～。どうしたら、早退出来るんだ？」

上浦　　狼。一年Ｃ組９番。
野球のポジションはキャッチャー。
趣味は彼女（沙代）と買い物に行くことだそうだ。
性格はまぁ、皆さん分かるでしょう。
身長は１６９．４ｃｍ。体重は５６．８ｋ。
狼君から一言。
「彼女の誕生日には、何を買ってやればいいんだ？」

大杉　　佐久。三年Ｂ組５番。
野球のポジションはセカンド。
趣味はペットと戯れること。ちなみに、ペットは犬が二匹いるらしい。
性格は優しく、頼れる人だ。
身長は１９１．３ｃｍ。体重は６７．８ｋ。
大杉先輩から一言。
「みんな、野球は楽しいぞ。後、ペットといると癒されるな。」

相田　　宗助。三年Ｂ組１番。
野球のポジションは外野だ。足がとても早い。
趣味はゲーム。
性格はとにかく、元気な人だ。
身長は１５３．５ｃｍ。体重は４５．３ｋ。
相田先輩から一言。
「どうにか身長伸びねぇ～かな。佐久と同じ位欲しいぜ。後俺の足に敵うやつはいないぜ。」

伊井　沙代。一年Ｃ組３番。
涼のお隣さんで、狼の彼女だ。
趣味は漫画を書くこと。
性格は優しいかな？
個人情報は秘密のようで、身長と体重は書かない。
一言は。
「一つ質問なんだけど、性格のところの優しいの後ろに、なんで？がついてるのかな？」

これで紹介は終わりだ。

「まて～！俺を忘れるな！」
すみません。忘れてました。ということで最後に。

淡田　海。一年Ｃ組１番。
野球のポジションはファースト。
性格はバカ。
趣味は聞く必要ないね。

身長、どうでもいいね。
体重、以下同文。

はい！終了！
「俺の一言は？」
みんな、聞きたくないって。
「分かったよ。そうやって、いじめるんだ。」
じゃあ、皆さん小説最後まで読んでね～。バイバイ～。
「はぁ～。なんで、俺だけ。」

7・紹介（後書き）

寝。

8・練習試合　前編（前書き）

番号入れるの面倒くなったのでもういれません。

8・練習試合　前編

本日は練習試合があります。

「今から、スタメンを発表する！」

一番。相田。外野。
二番。鈴木。サード。
三番。ジャック。遊撃手。
外国人？
四番。大杉。セカンド。
五番。田中。外野。
六番。相城。外野。
七番。上浦。キャッチャー。
狼呼ばれた。まぁ、試験の時ホームラン打ったんだもんな。
八番。梶原。ファースト。
淡田。終わったな。
九番。西川。ピッチャー。

「え～、以上がスタメンだ。」
「監督！何故俺が入ってないんですか？」
バカが抗議してる。
そりゃあ、試験の時の結果があれじゃあなぁ。
「お前は、まだ野球部に入って、日が浅い。もっと頑張ったら、スタメンにいれよう。」
「じゃあ、なんで俺と同じ日に入部した狼がスタメンなんですか？」
「今、キャッチャーは上浦しかいないからだ！」

「そうなんですか？」
「あぁ。監督の言うとうり、今キャッチャーの町田は怪我で試合出れない。だから、狼がスタメンって訳だ。分かったか？」
「わかりました。」
さすが、大杉先輩。淡田をうまくまるめこんだ。

さぁ、試合が始まりました。
解説はこの水谷がします。
只今、９－０で負けております。
えっ。なんでそんなに点を取られてるかだって。それは僕達のチームが弱いからですよ。
まず、一回の表にツーランホームランを打たれ、ピッチャーの精神はボロボロになって、その後はもう、うん。
という訳です。
しかも、ピッチャー交代でこの水谷が出ることになりました。
まぁ、頑張りますよ。

8・練習試合　前編（後書き）

新しい小説書きますので、よかったら見てね。

9・練習試合・後半（前書き）

眠いかも。

9・練習試合・後半

今の状況は、まぁ前回を見ていただければ分かると思う、水谷でした。

「水谷。練習通りに投げれば、大丈夫だ。」
狼の激励で、調子がちょっと上がったかも…
最初のバッターは８番かぁ～。
アウトコース低めのサイン出してきやがった！低め苦手なのに。
とにかく投げる。
バン
「ストライク！」
１４０出た～。練習しといてよかったぁ～。
次は、インコース高めにフォークかぁ。
フォークはまだ微妙なんだけどなぁ…。
カキーン
打たれた。
「ファールボール。」
ふぅ～。ファールだ。やっぱ、まだフォークは駄目だな。
次は、ストレートかぁ。
バン
「ストライク。バッターアウト。」
「よっしゃ！」
やっぱ気持ちいいな。
気分も上がって来たし、頑張るか。

「ゲームセット。」
終わった～。チームは負けたけど、俺は失点なしで四つ三振取

ったぜ。
「ありがとうございました！」
「水谷。なかなかよかったぞ！今日は。この調子で頑張れ！」
「はい！」
やった！監督に褒めれた。
「淡田～。どうだった？」
「よかったぜ！っていうか、俺試合出てねぇし！何がどうだった？だよ！」
そういえば、淡田は出てなかったんだった。
忘れてた。
「まぁ、次は出れるよ。きっと。」
「そうだな！」
狼は４打数４安打だった。
何やっても凄いな。狼は。
それ比べて淡田は。
「はぁ。」
「なんだよ。その人を哀れむような目は！」
淡田と狼を比べちゃ駄目か。

9・練習試合・後半（後書き）

こんばんは。雄助です。皆さんは本当に天国があると思いますか？

１０・テスト（前書き）

ほんと久し振りっす。バイトが忙しかったもので…

10・テスト

今日は授業中静かでした。
理由は学生の皆さんも嫌いだと思うテストが明日あるのです。
まぁ、そんな訳で静かでした。

「涼～。明日テストだぞ！どうする？」
淡田だ。だいたいこの時期になると、慌ててる。
授業中に寝てるのが悪いんだと思う。
「だからなんだよ。勉強すればいいだろ。」
「確かに勉強すればいいだけど、テストは明日だ！間に合う訳がない！」
「じゃあ、諦めれば。」
「それじゃあ進級が危うくなる！やっぱ、勉強会を開いて一緒に勉強すれば効率がいい。だから、勉強しようぜ！」
いや、淡田がいると勉強の効率が下がるから。
「二人で勉強会か？」
「狼と狼の彼女の伊井だ！二人いれば、きっと赤点はない！」
「おいおい、勝手に決めていいのか？」
「大丈夫だ！二人は涼の家で勉強会をすると言っておいた！」
「いや、勝手俺ん家にするなよ！」
そんな俺のツッコミは無視された。

「久し振りだなぁ～。涼の家来るの。」
はぁ～なんで俺の家で。
「そういえば、涼の家来るの初めてだな。」
勉強会を。

「俺も来るの初めてだ～！」
このバカのせいで。
「涼。そんな暗くなるな。」
「狼。お前に俺の今の気持ちが分かるか！」
そうだ。分かる訳がない。　「涼。なんでそんなに家に入れたくないんだ？」
「狼。お前には言っておいた方がいいかもしれない。」　そうあれは悲劇だった。

あれはここに引越して来て、二日位たった頃だった。
「涼～。遊びに来たよ～。」
「沙代か。何？」
「何よ！その来て欲しくなかったような、態度は！」
「別に。あがっていいよ。」
「おじゃましま～す。」
「で、何する？」
「え～とねぇ。まず、涼の部屋見る！」
「分かった。じゃあ、部屋行こっか。」
「うん！」

「ここが涼の部屋？少し汚いんじゃない？」
「そう？あんま気になんないけど。」
「やっぱ、少し空気も悪いし。よし！私が掃除してあげるよ。」
「別にいいよ。やんなくて。」
「いいからやるの！」
「はい！」
そんなことでいらないと言ってほとんどの物捨てれてしまった。

「それ以来、沙代を俺の家に入れたことはないんだ。なのに、あのバカが！」

「まぁ、だいたい分かった。沙代が掃除しないように俺が手伝ってやるから。」

狼。君がそんなに優しいなんて、僕はそんな友達を持てて幸せだよ。

「ありがとう。狼。」

「あぁ。」

「お邪魔しました！」

終わった。狼が助けてくれたおかげで、何とか阻止出来た。

「狼。今日はありがとうな。」

「あぁ。また明日な。」

「また明日。」

結局淡田は赤点だった。

「なぜだ〜！」

１１・涼の忙しい一日（前書き）

久し振りです。あるゲームにはまってしまって、書けませんでした。

11・涼の忙しい一日

「テストも終わって、やっと野球に専念出来るなぁ～。」
「お前は無理だろ。」
皆さん久し振り、涼です。
「何で、俺だけ無理なんだよ！」
こいつ忘れてるよ。
「前回のテスト、赤点だった人補習だぞ。」
そう、淡田は赤点だったのだ。しかも、２つも。
「なにぃ～！聞いてないぞ！」
ほんと相手してると疲れる奴だな。
「どうせ、ＨＲの時寝てたんだろ。そろそろ、部活の時間だな。じゃあな。」
「待ってくれ！俺はどうなる！」
どうなるって、補習だろ。
「監督には言っておくから心配するな。」
「そろそろ行くぞ涼。」
「おっ！狼。今行く。」
狼も来たことだし、淡田はほっとくか。
「待て～！」
うるさいなぁ。
「無視か！？俺ら親友だろ！」
狼とは親友だが、淡田とはギリギリ友達なので親友になった覚えはないな。
「お前ら～覚えてろよ！いつか仕返ししてやる！」
それだけ言って走って何処か行った。

「監督。」
「なんだ。」
「淡田は補習があるので今日は来れないみたいです。」
「分かった。」
監督と話すの苦手なんだよなぁ。なんて言うかな。雰囲気かな。
「涼！もう一人はどうした？」
宗助先輩だ。
「補習です。」
「補習かぁ～。俺はぎりぎりセーフだったなぁ。練習頑張れ！」
「はい！」
狼探すか…

「狼～。探したぞ。どこにいたんだ？」
やっと見つけた。
「ちょっとな。それより練習するか。」
「そうだな。」
まずは肩をあっためてと。
「そろそろいいか？」
だいたい暖まったな。
「いいぞ。」
「じゃあ投げてくれ。今日はなるべく指示したコースに投げてくれ。」
「了解。」
バン。
バン。
バン。
やっぱコントロールは難しいなぁ。
バン。

バン。
「もう少し、球速を。」
「あぁ。」
やっべ。コントロールに気をつけ過ぎて、球が遅くなってしまった。
バン。
バン。
バン。
「今日はこの位だな。」
「そうだな。じゃあ帰るか。」
「最近どう？沙代とは？」
ちょっと気になった。
「どうした？いきなり？」
「最近話してんの見てないから。気になった。」
「それは涼が寝てるからだな。ちゃんと話してるぞ。」
「そうか。ならいいけど。」
寝てる時にしゃべってたのか。
「また、明日な。」　「えっ！？」
ちょっと考えてたら、もう家だった。
「じゃあな。」
「あぁ。」
眠いな。寝るかな。
ガチャン
「ふぅ～。疲れた。」
ブーブー
携帯か。
誰だ？
母さんか。
「もしもし。」
「あっ！涼ちゃん？」

なんで疑問。
「どうした？」
「今日の夕飯作れないから伊井さんの家に行って食べてきて～。」
いや。迷惑だろ？
「今、涼ちゃん、迷惑だろ？とか思ったでしょ。大丈夫よ。涼ちゃんに電話する前に言ったから。」
「分かった。」
「じゃあね。涼ちゃん。」
「あぁ。」
なんて身勝手な。
夕飯まで時間あるし、寝るか。

「淡田～。何度言ったらわかるんだ？」
「もう7時ですよ。帰らせて下さい～。」
「これが終わるまで駄目だ！」
「え～。そんなぁ～。何で俺だけ。」
「お前が悪いんだろ！」
それから一時間淡田は地獄にいました。

１２・試合の前前日（前書き）

野球に近付いたような気もしない。

12・試合の前前日

「暑いなぁ〜。」
「あぁ。」
「ほんと、暑いなぁ〜。」
「あぁ。」
「喉渇いたぁ〜。」
「あぁ。」
「あ『うるさい！』」
「いたっ！」
さっきからうるさい。
「なんで叩くんだよ！」
「うるさいから。後、暑いから。」
今、俺らは1回戦目の相手の調査をしている。
暑い。
もう7月だ。
「いたっ！」
もう一回叩いてみた。
「何叩いてんだよ！」
「暑い。」
「答になってねぇ〜よ！」
こいつと居ると余計暑い。
「お前ら、調査しないと怒られるぞ。」
「あぁ。」
狼。何故君はそんなに涼しそうな顔しているのだ？
相手チームを見てみる。
特に目立つ人はいないみたいだ。
「そこまで強そうじゃないな。」
「だが、バランスがとれているな。」

「そうだな。」
「あちぃ～。」
こいつはやる気あんのか？
邪魔だよ。
あっ！そうだ。
「お～い。淡田。ジュース買ってくれれば？調査は俺らやっとくから。」
「ほんとか！？ありがとう！じゃあ、行ってくるぞ～！」
走って行った。
バカな奴だ。
ここから近くの店まで歩いて２０分も掛かる。
あいつなら、途中でバテて、４０分は帰ってこないな。
うるさいのがいなくなってよかったぁ～。
「そろそろ学校に帰るか？」
「そうだな。」

「ふぅ～。やっと学校着いた～。」
「監督に報告だな。」
「監督～。」
「帰ってきたか。どうだった？」
「特に目立った選手はいませんが、バランスはいいかと思われます。細いことは調査書に書いてあります。」
いつの間にそんな調査書書いてたんだ？
「分かった。じゃあ、帰っていいぞ。」
「分かりました。」
あれ？
「そういえば、なんか忘れてないか？」
「大丈夫だ。何も忘れてない。」

ならいいや。
「それより、明後日は試合だぞ。」
「遂に試合かぁ～。出れるか分かんないけど。」
「ピッチャー二人しかいないから出れると思うぞ。」
「そうかもな。」
緊張すんなぁ～。
「じゃあな。」
「あぁ。」
よし！明後日頑張ろう。
淡田は試合出れんのか？
ん？そういえば淡田ジュース買いに行ったままだったけ～。忘れてた。
まぁ、大丈夫か。淡田だし。

「涼～！狼！何処だぁ～！」
「くそ～。帰りやがったな！」
「覚えてろよ！仕返ししてやる！」
「ねぇ。お母さん。あそこの人なんで叫んでるの？」
「駄目よ。ああいう人に近付いちゃ。」　「うん。お母さん。近付かない。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9402c/

野球をやろう！

2010年10月14日16時59分発行